

南無大師遍照金剛 ~お大師さまとともに~

光明

こうみょう

新春

第198号

管長猊下のお言葉

特集

お寺に
ヨーガに行こう

特集2

明日へ送る技と志

最終回

熊五朗のまんだら談義

最終回

それぞれの遍路日記

しん こん しゅう ぶ ざん は
真言宗豊山派



観音さまのご縁

コーンコーンと乾いた槌つちの音が境内けいんにこだまして。

総本山長谷寺本堂の外舞台は解体作業たいたいの只中ただなかです。まだ暑さの残る9月半ば、平成27年中の完成を目指して、職人の息の合った仕事が続きます。

差配さばいするのは瀧川伸たきがわしんさん。長谷寺からほど近い桜井市橋本の株式

会社、瀧川寺社建築の社長です。こは寺社建築を主に手がけ、社員30名のうち26名の宮大工を擁する専門職の工務店です。

「前回、平成9年の外舞台改修の折、あそこ、舞台高欄たかざらの擬宝珠ぎぼしゅ柱。てっぺんの金物かねものをはずしたら卯治郎うぢらうと書かれた木札きさがあって、棟梁むねりやうだった私のおじいさんの名。

たぶん昭和36年の修理のものでしよう。祖父、さらに初代の曾祖父から続く観音さまとのご縁のあ

特集2

明日へ送る

わざ

こころ

技と志

りがたさを、あらためて思った」と話されます。こうして曾祖父から伸さんまで四代にわたり長谷寺のご用をつとめ、現在に至ります。

経験こそ宝

名匠の名も高い父昭雄さんのものと、瀧川さんの長谷寺での仕事は建物の修繕や、内部の台や棚を作ることから始まりました。

その下積み時に幸いしたのが、会社かいしゃが奈良にあったこと。県内の国宝建造物けんこくは60件を超え、国内最多を誇ります。歴史的な寺社建築の修復作業しゆふくにたずさわれたことが、若い瀧川さんにはなによりの経験けいけんとなります。

「経験を超える判断はできない。自分の経験が判断の尺度で、経験す





本坊(左)と新築の本願院(右)の屋根

るしかない」

「いいものを見
手で触り、木肌の
感触を手が知り、
心が識る。くり返
される現場の経験
こそが職人の宝」
あとに続く将
来の宮大工に、そ
う語る瀧川さん
です。

その宝が生か
されたのが、長谷
寺西の岡、五重塔
の下に新築なっ
た本願院。玄関と
棟の建物がつま
がるどころ、屋根
どうしが交錯し

ながらも破綻なく納まっているあ
たりの工夫は「小さな本坊を意識
したもの」と言います。

案内されて、先ごろ重要文化財
に指定された本坊に行き、大玄関
を見上げるとなるほど、優美な曲
線を描く檜皮葺の玄関屋根と庫裡
の屋根、大講堂の大屋根の3つがた
がいにおつかり、せめぎ合い、重層
するさまはまさにダイナミック。

父の師、松本才治（五重塔設計
者）らによる大玄関まわりの躍動
的な意匠は、孫弟子によって見事に
今の本願院に伝えられています。

不易流行

変わらぬもの（不易）と変わるも
の（流行）。瀧川さんの座右の銘で、

百年先への信号

時を経た木の建造物は部分的な
小修理をほぼ50年ごと、総体的な
大修理を2、300年の間隔で実
施することで、その姿を保ちます。

屋根がなく雨ざらしになる外舞
台は、18年おきの改修だそうです

が「たとえば新築の本願
院の大修理は200年先
か。私どもへの評価はそ
のとき。わかってくれる
人に向けて、そのときの
ために信号（形）を送る。
楽しい夢です」と話す瀧
川さん。

山に囲まれ、湿度の高
い傾斜地に立地する総本



が必要と強調します。

本願院の屋根が「不易」なら、
その山門の掘立柱は「流行」でしょ
うか。下端を塩化ビニルパイプで
保護し、地中の円柱形の受けは基
礎のコンクリートと一体化させた
特殊な形状の金物にすることで、
自立しながら腐朽を防止する。瀧
川さんが特許を取得した工法です。

山長谷寺。堂舎を無事後世に伝え
てゆくのはたやすいことではあり
ません。日々建物に目を遣り、適切
な手当てを施し、その命を延ばす
宮大工の存在があつてこそです。

技を伝え、志を伝えるその仕事
を、ご本尊十一面観世音菩薩は、
これからも確かに見守りくださ
います。

また「はじめから形のある部材を
組立てるだけならただの組立作業。
形のないものを形にするのが職人の
仕事」との瀧川さんの信条も、社内
でしっかりと根づいているようです。
長谷寺から車で15分も走ると桜
井市南郊の作業場に着きますが、
そこで黙々と仕事にはげむ姿には
襟が正される思いです。

